

# P 2

2008(平成20)年5月24日鑑賞(ユウラク座)



監督・共同脚本＝フランク・カルフーン／共同脚本・製作＝アレクサンドル・アジャ、グレゴリー・ルヴァスール／出演＝レイチェル・ニコルズ／ウェス・ベントリー／サイモン・レイノルズ／フィリップ・エイキン (ムービーアイ配給／2007年アメリカ映画／97分)

……この監禁モノは、エッチ系？ それともホラー系？ いやいや、これは対決型！ 軟弱な「ファック野郎」と腕力で対決する、美しくかつ力強いヒロインに敬服だが、知力不足(?)と過剰防衛はいかがなもの……？ ニューヨークのオフィスビルでも、クリスマスイブの夜はヤバイ！ すると日本でも、G.W. やお盆中の出勤は気をつけないと……。



## この監禁モノはエッチ系？ ホラー系？ それとも……？

美女の監禁モノはたくさんあるが、それは大きくエッチ系とホラー系に分けることができる。前者の代表が『完全なる飼育』シリーズであり、後者の代表が『悪魔のいけにえ』(74年)……？ その観点からすると、『P 2』はR-18指定とされているが、どっちつかずで中途半端……？

「R-18」は残虐性の観点から指定されたようだが、『ソウ』シリーズのエグさが大いに若者に受けている現在、『P 2』程度のエグさではタカが知れたもの……？ 他方、エッチ度は、ヒロインのアンジェラ(レイチェル・ニコルズ)が胸を大きく見せた白いドレス姿で走り回るものの、駐車場の警備員トーマス(ウェス・ベントリー)の監禁の意図がエッチ目的ではなく、一緒に食事をしたい、楽しく語り合いたいというだけ(?)だから、その方面の危機感も期待感(?)も見えてこない。そもそも、アンジェラがやっと意識を回復した時、どのようにして白いドレスに着替えさせられたのかを考えれば、そこにはいろいろな可能性があったはずだが、その点の追及が弱い(?)のは残念……？

エッチ系でもホラー系でもないこの監禁モノは、あえて言えば、強いヒロインが軟

弱な監禁者と対決するゲームを楽しむ、「対決型監禁モノ」……？

## 監禁モノに不可欠な密室性は……？

大阪市のと真ん中で、都心居住と職住接近の生活を満喫していると、ゴールデンウィーク中やお盆休みのお市内はガラガラで、人も車もまばらということがよくわかる。また、日曜日の夜、自転車で御堂筋を難波から本町、淀屋橋へと走っていると、明かりのついている店舗はごくわずか。この映画はパリの地下駐車場で、ある女性が体験した実話をベースにつくられたとのことだが、ニューヨークの高層ビルのオフィスでも、さすがにクリスマスイブの夜ともなればガラガラになるらしい。

OLのアンジェラも家族との約束があるため早く帰りたいのはやまやまだが、どうしても処理しなければならない仕事があり、やっと残業が終わったところ。「あと25分で帰る」とケータイで連絡した後、彼女はP2＝地下2階の駐車場へ急いだが……。

潜水艦モノが面白い理由の1つは、狭い密室空間なればこそその人間の本性がよく見えること。それと同じように、監禁モノが面白い(?)のも、密室性の中に監禁者の異常な人格が浮かびあがってくるためだが、大きなオフィスビルのP2という密室性の薄い空間で果たして監禁モノが成り立つの……？

## 下山判事との共通点は……？

監禁モノでは、監禁者は普通性格異常者。他方、被害者の多くは偶然に選ばれた女性ではなく、ストーカー的にずっと狙われていた女性のケースが多い。

現在、宇都宮地裁の下山判事がストーカー行為で逮捕された事件が注目を集めているが、2008年5月25日付読売新聞によると、彼は通話記録の搜索令状を自ら交付するなど、捜査の動きを知る立場にあつたらしい。しかして、『P2』の監禁実行者トーマスは地下駐車場の警備員だから、下山判事と同じように(?)駐車場利用者から絶対的な信頼を得ている職業。ところが同時に、警備員室にいる警備員は、四六時中各ポイントに設置された監視カメラで地下駐車場をチェックしているのだから、特定の興味ある女性の動静に注目することが職務上可能。したがって、ストーカー的性癖を持った警備員が、特定の女性のデータを集めようとすれば、それは下山判事と同じように容易だからコワイ!!

## 秋本鉄次氏の「レイチェル讃歌」をどう見る？

今や『キネマ旬報』（月2回）と『人民中国』（月1回）は私の愛読書となったが、『キネマ旬報』には秋本鉄次氏の「カラダが目当て」という秘かに私が楽しみにしている軽妙な連載がある。その5月下旬号は、「5月はレイチェル月間！ 今やレイチェルはワイズに非ず！」という見出し。そして、「同じ〇〇でも……お題の真打ちは『今やレイチェルと言え、ワイズに非ず、ニコルズ！』と豪語」と、秋本鉄次氏は、『P2』の闘うヒロイン、レイチェル・ニコルズに一目惚れのご様子。『P2』のレイチェル・ニコルズの何が気に入ったのかというと、それは「対決型監禁モノ」における「エロパツなキャリア美女による“手錠のままの反撃”が高ポイント」らしい。つまり、①相手のドーベルマンを車の中でぶち殺し、②駐車場階上階下を暴走するチキンレースでも『上等じゃないさ！』と啖呵を切り、③スタンガンにはスタンガンで報復する頼もしさ、だが、この映画の見どころがそこにあることは私も同感！

しかし私には、ここまで闘争心も腕力も体力もあるヒロインなのだから、もう少し知恵をめぐらせれば、トーマスのような「ファック野郎」をやっつけるチャンスはいくらでもあったのに、と思えるのが難点。もっとも、アンジェラはもともと強かったわけではなく、状況に応じて少しずつ強くなっていったわけだし、またそれは1つ1つの学習効果によるものだが、それでも「野村流ID野球」ばりにもう少し頭を使えば、もっと楽に脱出できたのでは……？

## イマイチ見えない、トーマスの「狂気」

この映画の謳い文句は「今、あなたの身に迫る恐怖と戦慄——」、そして「“狂気”はあなたのすぐとなり存在する——。」だが、トーマスの狂気とは果たしてナニ……？

警備員室で孤独な警備業務に就いているトーマスが、「俺は孤独だ」と感じているのは事実。しかし、トーマスのアンジェラに対する狙いが性欲や征服欲ではなく、ただクリスマスイブの楽しいお食事をしたいだけなら、アンジェラはトーマスのご機嫌をとりながらそれに合わせ、翌日解放されたらすぐに警察に通報という手もありうるはず……。トーマスのホントの狙いが見えなければ、アンジェラとしても対策の施しようがないのだが、なかなかそれが見えてこないから、私も少しイライラ……。

しかも、トーマスがアンジェラに手錠をかけたまま車に乗せて、地下駐車場を降りていったところに、猿ぐつわ姿でイスに縛りつけられていたのは、アンジェラの上司ハーパー（サイモン・レイノルズ）。トーマスはエレベーターの中でハーパーがアンジェラに対してセクハラ行為をしたことをモニターで確認したため、そんなハーパーに対する報復が必要だと考えたらしい。ここでも、アンジェラが不穏な行動を見せた（？）ため、結果的にトーマスはハーパーを殺してしまうことになるのだが、私の観る限り、トーマスは必ずしも最初からハーパーを殺すつもりではなかったよう……？

他方、いくらクリスマスイブをアンジェラと一緒に過ごしたいとか、アンジェラの上司には報復が必要だと考えたとしても、いったんこんな行動をとってしまえば、明日以降、トーマスは一体どうするの……？ そこらあたりのトーマスの「意図」や「計画性」が見えないのが、この映画の弱点……？ さて、あなたはトーマスの「狂気」をどのように分析……？

## こりゃ、明らかに過剰防衛だが……？

大阪でもクリスマスの時期はかなり寒いですが、ニューヨークはそれ以上の寒さのはず。したがって、ドレス1枚で裸足姿のアンジェラが、エレベーターの中に籠城したのはいいが、そこを「水攻め」にされたのだから、その寒さはいかばかり……？ そんなトーマスからの攻撃にめげることなく、秋本鉄次氏が誉めたたえるような武勇伝を展開していくのだから、アンジェラの闘争心は立派なもの。そして、ラストでは遂に手錠でトーマスを車につなぎ止めたから、これでひと安心。

しかし、アンジェラにしてみれば、クリスマスイブを家族と過ごす楽しみを台なしにされたうえ、こんな危険な状態に自分を追い込んだトーマスが憎たらしいのは当たり前。したがって、その頭を2つ3つどつきたいのは当然だが、アンジェラはトーマスを後にして現場を去ろうとしたから、これからすぐに警察に連絡するつもり……？ ところが、そこで聞こえてきた背後からのアンジェラを口汚く罵る声がよほどカンに触ったのか、そこでふり返ったアンジェラがとった行動とは……？

再三再四、アンジェラの勇氣ある男勝りの闘争力に感心していたが、ここで最後にとったアンジェラの行動はアッと驚くべきもの。そしてそれは、弁護士の私の目から見れば、明らかに過剰防衛だが……？

2008(平成20)年5月26日記